
グリンワーズの災厄の乙女【第三部・故郷編】

青柳朔

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

グリンワーズの災厄の乙女【第三部・故郷編】

【Nコード】

N8259S

【作者名】

青柳朔

【あらすじ】

災厄の乙女と呼ばれたマリツィアが、隠れず密やかに暮らさずにすむ場所を求めて、早めに国を出ようとするレギオン。しかしマリツィアはそれを拒んだ。

この国を出る時、それはこの国のすべてにさよならをする時。

「私は、レギオンに後悔してほしくない」

だからこそ、きちんと別れを告げたい。

1：帰れない場所

ラナさんえ

おげんき ですか。わたしは げんきです。

おうと ではとてもありがとうございました。いっぱい
かんしゃ しています。

レギオン におしえてもらって、じ をかけるようになりました
が、まだまだヘタです。

よみにくかたら ごめんなさい。

これから まちにいるときはラナさんに てがみを かきたい
とおもいます。

いまはおうとの となりのとなりくらいの まちにいます。

いま レギオン とはけんかしてます。

ぜったいぜったいレギオンが わるい です。わたしわるくない
です。

振り返ると、フードを深くかぶっている少女の口元だけが見えた。
不機嫌そうに口を引き結んでいる。いつもは隣を並んで歩くところ
を、黙り込んで後ろをついてくるだけなのは、無言の反抗のつもり
なのだろう。距離があいているのに気づいて速度を落とすこちらの
身にもなつてほしい。

王都を発ち、今は国外に出るために国境を目指していた。王都を
出たばかりの頃は嬉しそうに笑って「どこへ行く？」なんて聞いて
来たくせに、今は俺の声になんて反応しないとも言いたげに無愛

想を隠さない。

「マリーツィア」

仕方なくこちらが折れて声をかけても、マリーツィアは返事をしない。ちらりと見える口元はむっとり閉ざされたままだ。

「……何がそんなに気に入らないんだ。俺の都合であって、おまえは関係ないだろう」

彼女の不機嫌の原因を思い出して、俺はため息を吐き出した。今日はこのまま野宿になる。誰もいない二人きりの状態で、このまま黙りこまれると正直居心地も悪い。

「関係なくないっ！」

マリーツィアは噛みつくように顔をあげた。その拍子にかぶっていたフードがばさりと落ちる。

肩に届かない程度に切りそろえられた、真っ白の髪。こちらを射抜くように見つめてくる瞳は深い森の緑。災厄の乙女と呼ばれたその容姿は、見た目だけには可憐に映る。

「私は絶対に嫌だからね！ 絶対に絶対に嫌だからね！」

しかしその可憐な見た目とは裏腹に、内に抱えるものは意外に苛烈で頑固だということは、おそらく俺くらいしか知らないだろう。

「だから どうしておまえが俺の故郷に行く必要がある」

はあ、と重たいため息を吐き出して問う。

彼女がずっと黙り込んでいた不機嫌の理由は、本当に些細なものだった。少なくとも、俺にとっては。

王都を出てすぐ、マリーツィアは俺を見上げて問うた。

「これからどこに行くの？」
と。

だから俺は素直に答えただけだ。

「すぐに国から出る」

彼女が災厄の乙女と呼ばれる存在だということも、本物だと知らない人間からもその容姿は迫害しかされないということも知っていたからこそその結論だった。その為に必要な準備も王都でほとんど揃えた。

「……すぐに？」

「ああ、出来るだけ早く。国を出ればおまえもずっとフードをかぶっている必要はなくなるしな」

首を傾げて問う彼女に、俺は頷きながらその頭を撫でた。しかし彼女の瞳は不満げに揺れる。

「……この国を出たら、もう帰って来ないんだよね？」

今さらすぎる問いに、俺は頷いた。そもそもこの国は彼女にとって帰る場所ではない。俺にとっても、発ったところでなんの未練もない場所だった。

「じゃあ……レギオンの故郷には寄らないの？」

予想外の言葉だった。

だから俺は返す言葉を探すのに時間がかかった。マリーツィアは不満げな　そして少し悲しそうな目で俺を見る。

「もう戻らないなら、ちゃんとさよならしなきゃダメだよな？」

「……別れを告げるような人間は、俺の故郷にはいない」

たった一人の肉親だった妹を亡くしたことも、マリーツィアには話した。妹が　ヒルダが死んだ、殺された原因が『災厄の乙女』で、それで村人とも疎遠になっている。ヒルダはあの村そのものに殺されたといっても過言ではないから。

「でも、妹さんはいるんでしょう？」

故郷に。あの場所に。マリーツィアの瞳は言葉以上のものを俺に告げていた。眠っている。死んでいる。そういう意味合いのはずなのに、どこか優しい言い回しに俺は戸惑った。目の前の少女がそんな気遣いをするはずがないと思っていたからだろうか。

「ならちゃんとさよならしなきゃ、ダメだよ。それに私も挨拶したい。妹さんに、ごめんなさいとありがとうを言いたい」

「おまえが謝ることはない」

暴かれたくない痛い場所を、優しく開かれているような気分だった。少し乱暴にマリーツィアの言葉に答えると、彼女は気にした様子もなく首を横に振った。

「うっん。レギオンを連れていくから、ごめんなさいとありがとう。私は妹さんの死に責任は持てないけど、大事なお兄さんを盗っちゃうから」

素直なその言葉に、また胸が痛くなった。

おまえが俺を連れていくんじゃないだろう。俺がおまえを、あの森から連れ出したんだ。あんな場所で死を待っただけの人生を送らせたくなくて。もっと別の生き方を教えてやりたくて。俺のEGOで、おまえの世界を壊した。おまえを守る箱庭を破った。だからその分俺の一生がおまえの為に使われていくのは、当然のことだと思った。それで良いとも。

「…… 必要ない。ヒルダは、そんな風に思わないだろうから」

苦笑しようとして、上手く笑えないことに気づいた。誤魔化すようにまたマリーツィアの頭を撫でる。

「妹さんがとかじゃなくて、私がそうしたいの。それにレギオンにもちゃんとさよならして欲しい。あとで後悔するようなことはないように」

動揺している俺とは違い、マリーツィアは何の迷いもない目で俺を見てきた。

ああ、もうこれは簡単に折れない目だ。頑固な彼女がこれと決めたことは、そう簡単に覆してはくれない。

だが俺も負けを認めたくはなかった。

さよならなんて必要ない。ヒルダはもう死んでしまって、あそこにあるのはただの亡骸だけだ。…… そう言い訳して、俺はただあの村に行きたくないだけなのかもしれない。

良い思い出さえも霞んでしまうような記憶しかない。まして、あの村にマリーツィアを連れていくことの方が嫌だった。災厄の乙女

を忘れられないあの村にマリーツィアが姿を現わせば、村人の心中は穏やかではないだろう。もしかしたら危害を加えられるかもしれない。

そんな危険性を考えれば、行かないという選択は正しいものにか感じなかった。

1：帰れない場所（後書き）

グリーンワーズ第三部、始めます。

これが完結編の予定です。おそらく第一部や第二部より長くなると
思いますが、最後までお付き合いいただければ幸いです。

2：君が望むすべて

ろくに夕飯も食べないまま、マリーツィアは不貞腐れたまま毛布にくるまった。いつもなら寄るなど言っても勝手に隣で寝ているくせに、今夜は焚き火を挟んだ向こう側で眠っている。子どもしか言いようのない行動に苦笑しつつも、わりと効果はあるようだ自分自身に呆れていた。

パチ、と俺を笑うように火が爆ぜた。

こんな年下の少女に振り回されている様はさぞ滑稽だろう。だが周囲にどう思われようとも生き方を変えるつもりはなかった。

行き先を変えるのなら、もう猶予はそれほど残っていない。これ以上進むと引き返すことになって時間の無駄だ。

「……さて、どうするか」

はあ、とため息を吐いて夜空を見上げる。街中にいるよりも星はずっとよく見える。月がないせいだろうか、星の輝きは一層増していた。頬を撫でる夜風は冷たい。もう初夏になる頃なだけどな、と苦笑して立ち上がった。自分の毛布をマリーツィアにかけてやるうとして、寝顔を覗き込む。

閉じた瞳の端に、小さな雫があった。指先でそっと拭ってやると、くすぐったそうにマリーツィアが身をよじる。

「……レギオンの……ばか」

風の音にかき消されてしまいそうなか細い声で、そんな不平を呟く。

「馬鹿で悪かったな。この頑固娘が」

こつん、と額を小突いて毛布を肩までかける。頬にかかる白い髪を払い、よく眠れるよう祈りながら頭を撫でてやった。

実際のところ、答えなんて初めから決まっていた。

どれだけマリーツィアが間違ったことを言っただとしても、危険な

道を歩もうとしても、俺はこの少女を守ると決めたのだから。本当に幸せだと思える場所を見つけるまで。

夜が明けると、マリーツィアは怒ったらしいのか笑ったらしいのか分からない顔で俺に毛布を返してきた。

「……………ありがとう」

素直にお礼を言うことも、まだ屈辱なのだろう。長い躊躇いのあとに小さく告げられた感謝に、俺は内心で笑う。今それを顔に出したらお姫様の機嫌はますます悪くなるだろう。

「その川で顔洗ってこい。朝飯食ったら行くぞ」

「…………レギオン」

いつもどおりに振る舞うこちらを無視して、マリーツィアは不満げな声で俺を呼ぶ。どうやら昨日の続きをやりたいらしい。性格が頑固なせいか、随分と引きずるなと苦笑する。

「…………予定を変えるつもりはない。出来るだけ早く国を出る。…………ただ少しルートを変える。その先で村があれば一日くらい休みこともあるかもしれない。…………マリーツィア、意味が分かるか？」

マリーツィアの顔を見ると、きょとんとした瞳がほとんど輝きを増してくる。まるで宝物を見つけた子どもみたいな顔をして、マリーツィアは勢いよく頷いた。

「うんっ！　ありがとうレギオン！」

その嬉しそうな笑顔が眩しい。こちらのわずかに残っている躊躇いまで暴かれそうで、俺はなんとも言えない顔でマリーツィアの頭を撫でた。

マリーツィアはぱたぱたと川に寄って顔を洗っている。荷物の中から食料を取り出して、毛布は畳んでしまう。携帯食はお世辞にも美味しいと言えるものではないので、温かい飲み物で飲み込めるようにとお湯を沸かしておく。

「ただいまっ」

言葉の端に嬉しさを滲ませながらマリーツィアは昨日とは打って変わってにこにこ俺に話しかける。単純なやつ、と小さく呟いた。「ほら」

携帯食料を渡して、そのあとにお茶を入れる。マリーツィアは嫌な顔一つせずにもそもそと食べ始めていた。

「……熱いから気をつけろよ」

カップを渡すと、マリーツィアはこくんと頷く。もそもそもそ、と小動物か何かのようにかぶりついている。無表情と言えば無表情だが、食事時のマリーツィアは心なしかいつも楽しそうだ。

「……美味いか？ それ」

旅に慣れ携帯食のなんとも言えない味もどうにか耐えられるようになった俺とは違い、マリーツィアはここ数日初めて口にしたもののはずだ。彼女が不機嫌だった間はそんなことを気にする余裕もこちらにはなかったが。

「美味しいよ。誰かと一緒に食べるとね、どんなものでも美味しく感じるんだよ」

当たり前のことのようにそう答え、マリーツィアはお茶に息を吹きかけて冷ましながら口をつける。

思えば彼女が誰かと一緒に食事をしたのは、まだ数えるほどしかないのではないか。食の細いマリーツィアにあれこれとラナが食べさせようとすると、困りながらも嬉しそうにしていた。

食事なんて、ただ空腹を満たすだけのもの。もう長いことそう思っていた気がする。けれど思い出してみれば ヒルダが頑張って作った料理を、俺は笑って食べていた。失敗作でも、自信作でも、食卓を兄妹の笑顔で彩りながら囲んでいた。

「……まあ、そうだな」

「そうだよ」

マリーツィアが頷きながら胸を張る。ふ、と笑いながら残ってい

たお茶を飲みほして立ち上がる。

空を見上げると雲もなく、風もそう強くない。天気が崩れる可能性を心配しなくて済みそうだ。手早く焚き火の跡を消して、荷物をまとめる。出立の準備を始めた俺を見て、マリーツィアも慌てて残りを口に放り込んでお茶で飲み下した。

「行くの？」

「おまえの準備ができてるならな」

そう答えると、マリーツィアは立ち上がってスカートについた土を払って、小さな鞆を肩から下げる。髪を適当に梳かして、その上から深くフードをかぶった。ざっと自分を見下ろしてから、顔をあげる。

「大丈夫！ 行こうレギオン」

満面の笑みで答えたのが、深く被ったフードの隙間からでも充分に分かった。

その笑顔を見てまあ悪くないかもしれない、なんて思ってしまうあたり、俺はもう毒されているのかもしれない。彼女と言う名の毒に。

3：懐かしむには、遠く

自分の生まれ育った村が近くなるにつれ、眉間に皺が寄っていくのが分かった。ヒルダと一緒に過ごした時間よりも、冷たくなって横たわるヒルダの姿の方が鮮明に脳裏に焼き付いている。

いつまで過去に縛られているつもりだ、俺は。そう自分自身を笑っても、足は重石をつけられているように重くなっていく。

「レギオン」

名を呼ばれてはつとすると、目の前にマリーツィアが立っていた。必死で手を伸ばして、人の眉間をつつく。

「ここ、癖になっちゃうよ？」

どうやら皺の寄った眉間をどうにかしたいらしい。しかし身長差のせいか、指で皺を伸ばすまではできないようだ。

「……もうなってる」

「嘘。いつもはこんなになってないよ」

知ってるんだから、と胸を張るマリーツィアに苦笑する。そんなに言い切れるほど一緒にいるだろうか。彼女と出会って一年と少し共に過ごした時間はもつと短い。

苦笑すると、今度はマリーツィアが眉間に皺を寄せた。どうやら機嫌を損ねたらしい。

「……そんなに、嫌なの？」

眉間をつついていた指は、するりと移動して俺の頬を撫でる。その時に眼帯に触れるのはもう彼女の癖らしい。こういう時は、少女というより女の顔になるんだな、とまた苦笑した。

「嫌という問題じゃないな。もう、染みついてるんだ。あの村から逃げるのが」

情けないことに、と言うとますますマリーツィアは眉間に皺を寄せる。なるほど、これが癖になるとさすがに俺も見るに苦しいかもしれない。

「私は、故郷なんて分らないけど」

じっと見上げてくる深緑の瞳が、悲しげに揺れる。

「故郷って、いつでも帰れる、どんな自分も受け入れてくれる場所だと思ってた」

物心つく前にあの迷いの森に連れていかれたマリーツィアは、自分の生まれた場所を知らない。それどころか、母親の顔さえ覚えていない。連れていくことは出来るのに、彼女は俺の申し出をきっぱりと断った。

私が行っても、意味はないだろうから。

なんとも言えない表情で、マリーツィアはそう言った。今更行ってみたところで、何か感じるわけでもない。母親と会っても、母親と思えないかもしれない。それ以上に、自分が生まれた村に姿を現わせば『災厄の乙女』の不在が知れ渡ることになるかもしれないから、と。

「そういう場所を、見つければいい」

マリーツィアの頭を撫でてそう言うのと、彼女は嬉しそうに笑った。

「レギオンの生まれたとこって、どんなところ？」

ゆっくりと歩きながら、マリーツィアを俺を見上げて問う。聞きたくても遠慮して聞けなかったんだろう。

「何もないところだ」

「そんなわけないよ。いろいろあるでしょ？ 山があるとか、川があるとか、果物が美味しいとか」

誤魔化そうとしたのがバレたのだろうか、マリーツィアは頬を膨らませながら抗議してくる。

「……少し遠くに山が見えたよ。秋の終わりには雪をかぶっていた。その山から流れてくる川も近くにあったが　そうだな、果物が特産っていうのはないな」

残念だったな、と茶化すとマリーツィアは不本意そうに唸る。

「別に果物が目当てじゃないもん。他には？」

「他に、ねえ……」

催促されて、生まれ育った村を思い起こす。田舎の村だ。あるのは小さな雑貨屋くらいで、ほとんどは農業なんかで生活していた。小さな自警団もあったが、平和そのものの村で必要になるのは酔っ払い同士の喧嘩の時くらい。一部には山まで行って狩りをしてくる人もいた。

そう、王都に比べると、静かで、穏やかで、時間がゆっくりと流れていた。そして。

「……空が、広い場所だよ」

無意識に空を見上げて、そう呟いた。

マリーツィアはきょとんとした顔をして、そして花のように笑う。
「素敵ね！」

そんな一言で、胸の中でざわついていたものが落ち着いていく。不思議だな、と思った。村を思い出すたびに蘇るのは狂ったような人だからと、冷たい妹の身体だけだったのに。

王都の雑然とした街並みに比べて、建物の数すら少ないあの村は見上げた時、途方もなく広い空があった。そんなことを今さら思い出すなんて。

マリーツィアはすっかりご機嫌で、鼻歌まじりに歩いている。王都の館に滞在していた間に覚えたのだろうか、グリーンワーズの塔で聞いたあの歌以外の歌を、最近ではちらほらと聞くようになった。

フードから零れる白い髪に、思わず魅入る。

村に着く前に、染めてしまった方がいんだろう。滞在するのは一日程度のつもりだが、どう転ぶかなんて分からない。念を入れるのなら、白い髪は隠し通すべきだ。

この王国では災厄の象徴でしかないソレを。

「？ レギオン、どうかした？」

視線に気づいたマリーツィアが、俺を見て首を傾げる。なんでもない、と答えてからずれているフードを直してやった。

どんなに面倒なことになると、今までその白い髪を染めるとは言わなかった。今まで否定され続けてきた彼女を、これ以上否定したくはなかったからだ。

選択肢は二つある。俺が染めろ、と言えばおそらくマリーツィアは頷くだろう。笑って「いいよ」と言うんだろう。目の前の少女は、自分自身でも気づかずに想いに蓋をしてしまうから。

守ればいい。その意志は尊いものかもしれないが、同時に驕りではない。事実過去に守れなかった人間としては。

「……髪、どうする」

選択を彼女に預けようとして、自分の弱さに舌打ちした。最低だな、と。

「？ 染めた方がいい？ 今までも宿屋とか良い顔されなかったもんね」

「嫌なら別にいい。染めておいた方が安全かもしれないが」

マリーツィアは自分の白い髪を引つ張って「うーん」と唸る。

「別にやじゃないけど……でも、出来れば染めたくないなあ」

珍しいマリーツィアの自己主張に、俺は目を丸くした。てっきりあつさりとした答えが返ってくると思っていた。

「レギオンの家族に挨拶するから。あんまり嘘はつきたくない」

微笑むマリーツィアに、俺は何も言わなかった。ただ頭を撫でる。

「大丈夫だよ。この間みたいに危ないことはしないって約束するし」

！ なんと家で大人しくしてもいいよ。字の練習したいし」

聞き分けのいいマリーツィアに、複雑な気分になる。じゃじゃ馬でも困るが、ここまで『良い子』というのもどうだろう、と考えてしまう。このくらいの年頃の少女といったら、我儘を言いたい盛りだろうに。

「少しくらい、我儘言ってもいいんだぞ？」

そう言つと、マリーツィアは「えー」と困ったように唸る。

「だって行き先変えたのも私の我儘だもん。充分だよ。……あ、そうだ！ でもちゃんとレギオンの家族のお墓参りはさせてね！ 約

束！」

行き先の変更はまだしも、墓参りが我儘か、と苦笑するしかない。にっこりと笑って子どものように指切りを要求する彼女に、大人しく付き合うしかなかった。

4：白の面影

少し向こうに、家が見えた。マリーツィアがぱつと目を輝かせる。
「レギオンっ！ あれかな？」

見えてきた村を指差して、マリーツィアが振り返った。苦笑しながら頷くと、彼女はいつもに増して楽しそうに笑った。

村の後ろには山がひっそりと佇み、周囲は特に何もない平野が広がっている。見渡す限り高い建物はなく、自然がそのままに残っていた。何年も変わらない光景に、胸が締め付けられるように痛くなった。何も変わらないことに失望しているのに、昔と変わらずにあるその姿に懐かしさを覚えるなんて、矛盾したものだ。

「行こう、レギオン。……大丈夫？」

楽しそうにくるくると走り回っていたマリーツィアは、すぐ傍に歩み寄って問いかけてきた。首を傾げる仕草が猫みたいだ。顔色が悪いよ、と付け加えられた言葉に否定はできなかった。

「よけいな心配するな。行くぞ」

マリーツィアの頭を撫でて歩き始めると、彼女も大人しく後ろをついてきた。フードをしっかりと被り直すあたり、旅に慣れてきている。

「どこに泊まるの？ レギオンの家ってそのまま？」

「掃除はしてないがそのまま残ってる。部屋もあるから安心しろ」

小さな家だが、俺の他にマリーツィアが増えたくらいで暮らせない家ではない。幼い頃は家族四人で暮らしていた家だ。マリーツィアは徐々に近づく村を見て「えへへ」と笑う。いつもよりしまりのない笑顔に、俺は「どうした」と短く問いかけた。

「なんだかね、嬉しいなあって」

風でフードが飛ばないように、と両手で押さえながらマリーツィアは笑う。

「何がそんなに嬉しいんだ？ 特に何もない村だぞ」

「うん、でもレギオンが育った場所だから」

だから来れたことが嬉しい、と子どもみたいに笑う。ああ、こういう一面もあるんだなとこちらは少し驚かされた。

「…………レギオン？」

意識が村よりもマリーツィアに移っていた、その時だった。マリーツィア以外の声で、自分の名前が呼ばれる。

顔をあげると、村の入り口に一人の少年がいた。鮮やかな赤毛に、青い瞳。

「リュカ」

今年で十七歳くらいだったか。小さな頃から知っている悪ガキは、一丁前に大人びていた。最後に会ったのはいつだったか。去年墓参りに来た時には会わなかったから、二年ぶりほどだろう。

「やっぱりレギオンかよ。ヒルダの命日でもないのに、どうして

」

気おくれせずに出てくる妹の名前に、わずかに微笑む。リュカはよくいるいじめっ子で、年の近いヒルダもよくその被害に遭ってはいたが、まあ悪い奴ではなかった。昔から。

リュカの視線が、俺の後ろに隠れようとするマリーツィアを捕えた。

「…………女連れ？ それにしては年下すぎねえ？ 俺より下だろ？」

あんたそういう趣味だったんだ」

「生意気な口きくなガキが。俺の連れだがそういう関係じゃない」

ふうん、と呟きながらリュカはマリーツィアをじろりと見る。人見知りしがちなマリーツィアはこそそと俺の背中に張り付いて離れなくなってしまった。

「マリーツィア」

諫めるように名前を呼ぶと、しばらく逡巡したあとで顔だけひょ

つこりと出した。野生動物か何か、と呆れるしかない。

「……はじめまして」

必要最低限の挨拶だけをして、また俺の背に隠れる。同じ年代の人間と会話することはそうなかったから、いつも以上に緊張しているんだろうか。

「どーも」

リュカもあまり興味がないらしい。適当な挨拶をしてそれきりマリツィアを見ない。

「で？　なんで何もない時期なのに帰って来てるわけ？」

「……国を出ることになったから、最後の挨拶をと思ってな」

誰に、と言わなくても分かるだろう。この村に俺が挨拶するような人間はいない。リュカは驚きもしなかった。

「そ。まあいつかそうなるような気はしてた。心配しなくてもヒルダの墓は綺麗なまんまだよ」

「　　そうか」

それしか言えなかった。それが指す事実に感謝も嫌悪もできない。……レギオン？」

背後から俺の様子を窺うようにマリツィアが声をかけてきた。

心配げな声に、情けないなと思いながら少し無理に笑う。

「いや。家に行くか。野宿続きで疲れたしな」

「うん」

マリツィアは素直に頷いて、俺を見上げた。村は相変わらず静かだ。静まり返っていると言ってもいい。ヒルダが死んだあの日から、村も時を刻むのを止めたようだ。ずっと動くこともできないまま、無為に外の時間だけが過ぎていく。

振り返り、マリツィアに手を差し出したところで、突風が吹いた。あおるように吹く風に、マリツィアの白い髪を隠していたフードが攫われてふわりと肩に落ちる。

「　　あ」

しまった、という顔をしてマリツィアが慌ててフードに手を伸

さすが、焦っているせいか上手く被れない。村人はほとんど外に出
ていないので目撃者という目撃者は、リュカしかないが。

「……………ヒル、ダ……………」

リュカは呆然とマリーツィアを見つめて、もういない人の名前を
呟いた。その小さな声は、広い空へと溶けるように消えていく。そ
の名前に、心臓が握られるような息苦しさを覚えた。

「リュカ」

半ば強引にマリーツィアにフードを被せ、名前を呼ぶとリュカは
夢から覚めるようにハツとした。ぼんやりとしていた瞳が、確かに
こちらを見る。

「その、子」

まだ戸惑っているように、声はただたどしかった。問い詰めるわ
けでもなく、責めるわけでもない。ただ惰性で発せられた声だ。

「ヒルダじゃないし、ヒルダの代わりでもない」

きっぱりと言い切ると、リュカは心臓を貫かれたような顔をした。
頭では分かっている、マリーツィアのもつ色彩にヒルダの面影を
思い出したのだろう。答えを教えてやれば、呆然としながら頷いた。

「……………訳あり？」

「聞くな。説明できるもんでもない」

付け入る隙もない速さで答えれば「ああ、そっか」と曖昧な返事
があった。そのままリュカは地面をじっと見つめたまま動かなくな
る。俺はリュカの脇を通り過ぎてそのまま村に入っていく。今は放
っておく方がいいだろう。

「レギオン、いいの？ あの人……………」

俺とリュカを交互に見ながらも、小走りで俺の後ろをついてきた
マリーツィアが問う。人見知りするくせに、心配性なのは厄介なも
のだ。

「いいんだ。あいつは頭を冷やした方がいい」

「でも」

マリーツィアが振り返ってリュカを見る。後ろ髪が引かれている
その様に、わずかな苛立ちを覚えた。

「子どもじゃないんだ。ほっとけ。ましてここはあいつの住んでる
村だしな。おまえが近くにいても逆効果にしかない」

そう言い切つてすたすたと歩くと、マリーツィアは何度も後ろを
振り返りながらも俺から一メートル以上離れることなくついて来た。

5：寂しげな家

ラナさんへ

こんにちわ。ラナさん おげんきですか？

いま わたしはレギオンのふるさにきています。そらのひろいところですよ。

おうと みたいにひとはおおくないです。しずかなトコです。

こおあいだは レギオンはきたくないっていつて 私はレギオンのふるさにきたくてケンカになりました。

いまはもうなかなおりしてます。しんぱい しなくてくださいね。レギオンのいもうとさんに あいさつしてから くをでようとおもいます。

このむらにきていちばんさいしょに リュカ とゆうおとこの子にあいました。

レギオンのいもうとさんに まちがわりしました。わたしはいもうとさんに にてるんでしょうか。

その子は すごくかなしそうな 目をしてました。

久しぶりに帰った家は、埃が積もっていることを除けば以前とまるで変わらなかった。マリーツィアは物珍しげにきよきよと室内を見回している。

「別に物珍しいものはないだろ」

苦笑しながら問うと、マリーツィアははぶんぶんと首を横に振った。

「すごいね、ここでレギオンが育ったんだ」

「育ったと言っても、十六歳までだ」

もう十年も前だ。それから王都で過ごしていたし、騎士団の一員として働いていた頃は仕事であちこちへと点々としていた。

「じゃあ今の私くらいまでかあ。あ、ねえねえレギオンの部屋ってどこ？」

興味津々な様子でマリーツィアが問う。十年前まで毎日使って、それ以降は墓参りに帰ってきた時に寝るくらいの部屋だが。

「……そちの部屋だ。おまえ入るなよ」

「え、なんで？」

「なんでも」

下手すればこいつはそのまま俺の部屋で寝ようとしただろうな、と想像して頭が痛くなる。宿屋では安全性や経済面から同じ部屋にしていたが、こうして他にも部屋があるのにどうして同じ部屋で寝なければならぬ。

「おまえは隣を使え。埃は被ってるが掃除すれば使えるだろ」

「隣？」

首を傾げてマリーツィアは俺が指さした扉を見た。

「妹の　ヒルダの部屋だ」

そう口にした途端、マリーツィアの表情が固まった。じっと扉を見つめたまま、何を言うべきか悩んで口を開いては閉ざし、そしてゆっくりと俺を見上げた。

「……いいの？」

揺らいだ深緑の瞳に俺が映っていた。私が使ってもいいの、という意味だろう。災厄の乙女の連鎖で殺された妹の部屋に、と。

「使えって言うてるのに妙な遠慮はするな。絶対に俺の部屋で寝ようなんて考えるなよ」

ただでさえ心労のたまる場所にいるっていうのに、気ままに寝ることも出来ない状況はキツイ。

「分かった。じゃあ綺麗に掃除するね！」

他の家事はほとんど出来ないが、掃除だけはマリーツィアもまとも出来る。料理や選択も覚えれば普通に出来るようになるだろう。わりと器用だ。

やる気満々のマリーツィアは腕をまくりながらヒルダの部屋の掃除を始めた。俺も自分の部屋の埃くらいはどうにかしないと、と箒を手にする。部屋に入っただけに窓を開けると、籠っていた部屋の中の空気が変わっていく。閉め切られていた室内が、止めた時と共にまた静かに時を刻みはじめるような気がした。

手早く部屋の中の埃を払い落とし、掃除を済ませる。そう長居する気もないのである程度まで片付けば及第点だ。マリーツィアは本気で掃除に取り組んでいるらしく、隣の部屋からはがたがたと少し騒がしい音がした。

「……こつちも片付けておくか」

玄関から入っただけの部屋は台所があり、食卓を囲うテーブルがある。昔はここで家族四人　兄妹で食事をとっていた。

食事をする場所くらいは、と自分の部屋よりは念入りに掃除をしておくことにした。どうせもう戻らない我が家だ。これくらいしておかなければ両親にもヒルダにも顔を合わせられない。俺の部屋は別にしてもらうとしても。

結局マリーツィアはその日の夕方までヒルダの部屋を掃除して、ピカピカにしていた。昼過ぎに村に到着したことを考えれば随分頑張ったものだ。ヒルダの部屋は散らかしていたわけじゃないし、掃除といっても埃を吐き出すくらいだったはずなのに。

「いつの間にごはん用意してたの？　レギオン」

俺が簡単に用意したスープを前に、マリーツィアがきょとんと目を丸くした。スープの食材もパンも荷物の中にあつたものだ。買い物には行っていない。

「おまえが必死に掃除している間だよ」

「それは分かってるけど……」

ここ最近のマリーツィアは料理の腕をあげたらしく、野宿の時も頻繁に手伝うと言い出してきていた。たぶん今日も手伝うつもりだったんだろう。

「……明日は絶対手伝うからね」

むすつとした顔でそう宣言して、マリーツィアはスープを一口食べる。途端に幸せそうな顔になるものだから、随分と現金なやつだ。あり合わせの材料で適当に作ったスープだっていうのに。

「それにしても、埃随分積もってたね。何年ぶりに帰ってきたの？」
今は埃もなくなった部屋の中を見ながらマリーツィアが問いかけてきた。基本的には一年に一度、墓参りに帰って来ていたが、去年はそんな暇もなく、帰れなかったなと思い出す。瞬く間に過ぎた一年だったから聞かれるまでそんなことにも気づかなかった。駄目な息子で駄目な兄だな、と苦笑する。

「二年ぶりくらいか」

「ふうん、じゃあお墓も綺麗にしてあげないとね」

すっかり嫁か何かのように張り切るマリーツィアに、さすがに複雑な心境になる。ここまでさせていいもんなのか否か。おまえは俺の恋人でもなければ嫁でもないだろう、と。かといってどういう関係なのかと問われると返答に困る。リュカに聞かれた時に誤魔化したように。

「……飯食い終わったら行くか」

どこに、とは告げずともマリーツィアは素直に頷いた。夜に墓参りなんて気味の悪いことこの上ないが、マリーツィアのことを考えれば人目のない夜の方がいいだろう。

「うん」

俺の考えが分かっているのかいないのか　マリーツィアはただ嬉しそうに頷くだけだ。

「月が綺麗だから、きつと楽しいね」

さらにそんなことを言いだすから、俺は苦笑するしかない。墓参

りが楽しい、なんて感想が浮かぶのはこいつくらいじゃないだろうか。

しかし窓の向こうへ目を移せば、マリーツィアの言うとおり月が冴え冴えと光を放っていた。星たちも今日は少しだけ大人しい。夜の不気味さなんてどこかへ吹き飛んでしまっくらの、清廉とした輝きだった。

6：涙を落とし祈る

頭上には月。

足元には濃い影が出来ている。月の光はいつもに増して強いのに、太陽とは違って眩しさを感じさせない。むしろ暗い闇を取り払うように輝いていることに今日は感謝していた。

おかげで、暗い中でもはっきりと見える。

『ヒルダ・オールデイス』

マリーツィアは墓石に刻まれた名前をなぞるように撫でた。ただじっと見つめて、しゃがんだまま何も言わない。ヒルダの墓の隣には両親の墓がある。そちらも申し訳程度に手入れがされて、花が添えられていた。ヒルダの墓はそれと比べる必要もないほどに綺麗で、花はつい先ほど供えたのではないかというくらいに瑞々しい。小さな田舎の村の墓地の中で浮くくらいに花が多く供えられている。

俺がこの国を去っても、きっとヒルダの墓はこの美しさを保つだろう。あの凄惨な事件を知る人間がこの世から去るまで。

「……綺麗だね」

ずっと黙り込んだままだったマリーツィアが、なんとも言い難い顔でそう呟いた。

「……ああ、いつもこうだ」

苦笑して、それからまた黙り込む。やってくる前はお花くらい供えたかったな、と手ぶらであることをぼやいていたマリーツィアだったが、小さな墓の前に供えられているたくさんの花を見てからはそのことに触れてこない。

夜の墓地で人目もないから、とマリーツィアはフードを下ろしている。白い髪は月明かりを受けて寒々しいくらいに白さを増していた。

「そっか……良かった」

しばらくすると、マリーツィアは供えられた花たちを見て呟いた。

何の話だろうと彼女を見下ろすと、マリーツィアは花を見つめたまま続ける。

「それなら、レギオンがいなくなっても、ここは綺麗なままなんだね」

家族がいなくなってしまったからといって、荒れてしまうことはないんだね。マリーツィアはほっと安堵したような顔をしていた。それが今まで幼さを残していた少女というより、憂いを帯びた一人前の女の横顔に見えて、動揺した。保護者気取りで傍にいて、時折湧き上がる欲から目をそらしてきた自分には充分過ぎるくらいの威力だった。

「レギオン？」

黙り込んだ俺を見上げて、マリーツィアが首を傾げる。白い髪がさらりと揺れた。俺を見つめる大きな深緑の瞳はこちらの感情を見透かしてしまいそうなのに、目をそらすことが出来ない。

「……どうか、した？」

おずおずと躊躇うような問いだった。女の顔をしていたはずのマリーツィアは、一瞬にして少女に戻る。そのことに安堵した。

「何でもない」

「レギオンは挨拶しなくていいの？」

墓の目の前から立ち上がり、場所を譲るようにマリーツィアがこちらを見た。しばし逡巡したあとで、墓の前にしゃがんで墓石をそつと撫でた。昔ヒルダの頭を撫でていたように。墓参りのたびにする癖だ。

硬質なその手触りは、ヒルダの柔らかい髪には到底及ぶまでもない。どんなに懐かしく焦がれたところで、あの髪の手触りは記憶の中で色褪せていく。

ごめんな、と心の中で呟いた。

おまえも父さんも母さんも、ここに眠っているのに。俺はそれを置いてこの国を出ていく。もうこの国には望みはないと思ったから。

たった一人の少女を守ろうとしても、この国のすべてがあっさりと彼女の敵になるだろうから。

置いていく、だからごめん、と。何度も許しを乞うように繰り返した。

許しを乞うたところで、それを与えてくれる人間はいない。けれどヒルダならきつと、笑うだろう。「いいよ、好きにして」と優しく笑うんだろう。そういう妹だと知っている。

思い出せばいくらでも涙は湧いてくる。出来ればマリーツィアの前では泣きたくない、こうして向き合うことに悩んだのに。気づけばぱたりと雫が落ちた。俯いた視線の先で、供えられた花が濡れている。ぼたぼたと、落ちてくる雫で花弁はどんどん濡れていった。情けない思いながらも、涙は静かに落ちる。日のある時間じゃなくて良かった、せめて夜の闇に隠れる時で。そんなことを思っていると、背中にくもりを感じた。

背に頬を寄せて、ただそっと身を寄せて、マリーツィアは黙っていた。泣かないで、と言うわけでもなく。下手な気休めの言葉を言うわけでもなく。ただ黙って、ただ傍にいと伝えるために。

お兄ちゃんは、人の為に生きる人だね。そんなことをヒルダが言ったことがある。その日の夕飯を運びながら、ヒルダは一人前の女の顔をしていた。

「なんだよ、突然」

その時にはもう両親は他界していて、家族はヒルダと俺の二人きり。俺は兄妹で生活していこうと必死だった。

「私はまだ子どもだけど、でも何も出来ないわけじゃないんだよね。なのにお兄ちゃんは自分のこと放って私のことを気にかけすぎだよ」

「たった一人の妹なんだから、当たり前だろ」

何を言い出すんだか、とその時は苦笑した。まだ幼い妹が、一丁前に大人ぶりたいんだろうと。

「そんなこと言ってるって婚期を逃しちゃうんだからね。お兄ちゃんみたいな人のところにお嫁にきてくれる人なんてそういないだろうし」

俺はまだ十六歳だよ、と笑った。確かに早い奴は十八、九歳で嫁さんをもらって、子どもがいたりする。けど俺はヒルダを任せられる奴が見つかるまでは身を固めるつもりはなかった。俺にヒルダ以上に大切な存在が出来てしまえば、いざというときヒルダを守る奴がいなくなるから。

「いいよ、別に。結婚なんていつか出来れば」

「もう、めんどくさがりなんだから」

そう言いながらヒルダは仕方ないね、と笑った。だってお兄ちゃんだもの。

「お兄ちゃんって、自分の為に時間を使わないよね。お人好しなんだから」

いつも頼まれると飛んで行って、喧嘩の仲裁とかしたり、家の修理を手伝ったり、そんなことしてばかり。趣味らしい趣味なんて、剣の稽古くらいじゃない。

「いいんだよ、それで」

「うん、いいよそれで。だからねお兄ちゃん。もしお兄ちゃんに大切な人が出来たら、私のことなんて気にしないでいいんだからね。お兄ちゃんの大切な人のために、お兄ちゃんの時間を使っていいんだからね」

私は、自分のことくらい自分で出来るから。

まだ幼い妹は、そう言って笑った。今思い出しても、出来た妹だった。

ゆっくりと立ち上がると、マリーツィアは黙って俺を見上げた。
何も言わず、ただ優しく微笑んで。その小さな手のひらで俺の手
を握って。何も言わずとも、その存在を伝えるように。暗闇の中で
もお互いのぬくもりを分かち合えるように。

どうかこのぬくもりは、褪せることがないように今はただ祈るだ
けだった。

7：ささやかな我儘

家に帰りつくまで、マリーツィアはずっと黙っていた。しかしそれは重たい沈黙ではなく、静かに流れる時間が心地よくもあった。眠るように静まった村は、客観的に見る限りは平和そのものだ。しかしどうしても、この村で長居をしようという心は湧きあがらなかった。自分にとって、安らげる場所ではなくなっているんだらう。

家に帰りつき、それぞれ部屋で眠ろうと別れる前にマリーツィアに声をかける。

「荷物、まとめておけよ」

目的は果たしたのだから長居する必要はない。早々に出立しようと思い、そう告げるとマリーツィアはきょとんとした目で俺を見上げた。

「なんで？」

まさかやってくるとは思わなかった問いに、俺の方が驚かされる。「もう用は済んだだろ？ 明日にでも出る」

きっぱりと言い切ると、マリーツィアは「え」と呟いて少し慌て始めた。

「だ、だつて着いたばかりだよ？ もう少しゆっくりしてもいいんじゃないの？」

珍しいな、と思った。マリーツィアは素直に自分の意見を言ったことが。普段の彼女は俺の言ったことに対して頷くばかりで、こうしたいと言うことはほとんどない。

ただこの村にいるのは精神的にきつい。そう言えてしまえば楽なのかもしれないが、大人としてのプライドがささやかに邪魔をした。そうでないとしても、マリーツィアが一つの場所に長くどまるの

は危険だ。まだここは災厄の乙女を生みだした国の中なのだから。
「あまりのんびりしてるわけにはいかないだろ。もう既にリュカに髪を見られてるんだ。……まあ、あいつは誰かに話したりしないと思っけどな」

マリーツィアの白い髪を見た時の、あの呆然としたリュカの顔。そこにある感情は恐怖ではなかった。リュカが嫌悪しているのは「災厄の乙女」ではなく、むしろこの村の　この国の「大人たち」だろう。

「で、でも私もう少しここにいたい」

自分の正体がバレることがどれだけ危険なことか分かっているはずなのに、マリーツィアは珍しく食い下がる。マリーツィアの容姿は間違いなくこの村の人間を刺激する。嫌な過去を思い出させるに違いないのだ。それがどう彼女にぶつかるか　想像しただけで吐き気がする。

「こんな何もないところ、長居する場所じゃない」

「ほら、食べ物とか買い足したりしなきゃいけないし、ちょっと疲れをとってから出発してもいいんじゃないかな」

必死に理由を考えながら、マリーツィアはなおもこの村に残ろうとした。他の街ならまだしも、こんな村でなんの準備ができるというのか。

「買い足すほど減ってない」

「て、てがみつ！」

マリーツィアのあげた理由を次々に否定していたところで、彼女はきつと俺を見上げて言った。

「ラナさんに手紙書いたの。レギオンの故郷にいるって書いたからもしかしたら返事が届くかもっ！」

それはきつと、彼女にとって最後の手段だったんだろう。こちらの住所なんて書いていないのだから、返事が届く確率は限りなく低い。マダムあたりに教えていたような気もするから、可能性がゼロと言いつつ切れないのは確かだが。

「……届くまで待つてゐるわけにはいかない」

王都からこの村までは距離がある。向こうに手紙が届いて、すぐに返事を書いたところで何日で返ってくるだろうか。

「分かつてゐる。でも、ちょっとだけ待つてみたい」

マリーツィア自身も上手い言い訳だとは思つていないんだろう。

少し萎れた声に、言い返す気力もなくなつてきた。

「……少しだけだから」

結局は折れてしまう自分にため息を吐き出した。マリーツィアがどれだけの時間をかけて手紙を書いているか目の当たりにしている分、ここで切り捨ててしまうことは出来なかった。

「ありがとう、レギオン」

ほつとしたようにマリーツィアは微笑む。正直、こうまでしてこの村にいたい理由なんて俺には分からない。思い出しくもない過去を抜きにしても、何も無い村だ。旅人が来たところで一泊してすぐに去っていくような、通り道としてだけあるような村。

今となつては息苦しささえ感じる、自分の故郷。

ベットで横になり、天井を見上げながらぼんやりと眠気がくるのを待つ。今頃マリーツィアは隣の部屋で眠っているだろう。

久しぶりの実家ということもあり、さらにもともと眠りが浅いせいもある、すぐには眠れなかった。野宿の場合は無理にでも寝ておこうとするものだが、宿がありある程度の安全が保たれている状態では必ず眠らなくてはならないわけじゃない。

「なんだって、こんなところに居たがるんだか……」

ヒルダが殺された時のことを、詳細に話したことはない。ただ、村人に殺されたと。その程度しかマリーツィアは知らない。

けれどそれだけでも充分に回避すべき理由になる。この村は彼女にとって危険な場所だ。おそらく王都よりもずっと。

理由らしい理由は、ひとつしか思いつかなかった。

『俺の故郷』だから、だろう。

はぁ、とため息を吐き出して寝返りをうつ。バカか、と思わず零れた本音が部屋の中で小さく響いた。

深い理由なんて本人に聞かなければ分からない。しかし、いつもは自ら主張しないマリーツィアがあんなにも食い下がったのは、ここが俺の育った場所だからなんだろう。

俺のことなんて顧みなくていい。

ただ自分のことだけを考えて、望んでくれればいい。
いくらそう願っても、彼女は俺を中心に据える。俺は、彼女の中で大きな存在になりたいなんて、願ってはいないのに。

8：少年はあの日の恋に捕らわれる

あまり寝付けずに、明け方近くに起き出した。外はほんのりと明るくなっている。太陽が徐々に空へ昇ろうとしていた。

家の外に出て、まだ夜の雰囲気に残る空気を吸い込む。少しは頭が冷える気がした。

本音はどこかへ行つて落ちついたかったが、寝ているマリーツィアを置いて出かけるわけにもいかない。俺の家に近づく村人がいるとは思えないが、一人で目を覚ましたら彼女は確実に俺を探しに出るだろう。

そう、刷り込みされた雛鳥のように。

ふう、とため息を細く長く吐き出して、目を閉じる。

「レギオン？」

ふと名前を呼ばれて、ハッと目を開ける。そこにいたのは白い髪の少女ではなく、リュカだった。

「こんな朝早く何してんの。ていうか、わりとのんびりしてるんだな。てつきりさつさと出て行くと思ったのに」

明るい声に、沈みかけていた感情がわずかに浮上する。リュカの纏う空気は他の村人と違って、少しだけ呼吸は楽になった。

「最後だからな、少しくらいはゆっくりしようと思って……おまえこそ何してるんだ。ガキがこんな時間に」

畑仕事をしている人間でもない限り、こんな朝早くに目を覚ますことはない。リュカの家は雑貨屋なのだから、もう少し寝坊しても許されるはずだ。

「……ん、まあ」

濁すように言葉を詰まらせるリュカを、俺は追及しなかった。も

う小さな子どもでもないのだから、人には言えない何かがあってもおかしくはない。ヒルダより一つ下だった少年は、背丈だけを見れば大人と変わらないのだ。

「ゆっくりしてるのはいいけどさ、あんたの家なんだし。……でも、あの子は気を付けた方がいいんじゃないかねえの？」

少し言い出しにくそうに言ったリュカが指すのは、マリーツィアのことだ。

「……そうなんだがな。その本人が駄々をこねたもんだから」

「……あの子、ほんとにどうしたわけ？ 遠い親戚ってわけでもないだろ。レギオンがこの国を出るって決めたのも、あの子のためじゃないの？」

リュカが問い詰めるように言う。しかしその目は答えを聞くことを怯えているように目をそらした。

「答えられない、と言ったはずだ。国を出るのは まあ、あいつのためだけだな」

否定できないそれは、苦笑しながら答えた。どんなに嫌っていても離れることが出来なかったのは、決定打になるものがなかったからだ。ずるずると生まれ育った国のぬるま湯に浸っていたのは怠惰だったのかもしれない。マリーツィアという存在が、俺の行動の起爆剤になったのは否定しきれなかった。

彼女のような、なんの罪のない少女を悪にした国を良しとするのか。そんな国を守るために騎士団に居続けるのか。答えはどれも否だった。

「……レギオンは、あの子にヒルダを重ねてるんじゃないのか？」

リュカは地面を睨みつけるようにしながら、苦しげに問いかけた。マリーツィアを目にした一瞬、ヒルダの名前を呟くくらいに、まだこの少年は覚えていた。幼い頃のあの日を。

「守れなかったヒルダの代わりに、あの子を守って、大切にして、

それでレギオンは救われないんじゃないのか？ あの子をヒルダの身代わりにしてるんじゃないのかよっ！」

そう叫んで、握りしめられた拳は、震えている。リュカの問いは怒りを孕んで早朝の空へ響いた。

俯いているリュカの表情はこちらからは窺えない。赤毛の髪が炎のように揺れていた。怒っているのか泣いているのか。もしかすれば、その両方なのかもしれない。

「それも、言ったな。マリーツィアはヒルダじゃないし、ヒルダの代わりでもない。ヒルダはヒルダだ。俺の、たった一人の妹だよ」
ゆつくりと諭すように答えると、リュカの肩がびくりと震えた。
マリーツィアのことを話しているように見せかけて、リュカが語っているのはヒルダのことだ。

「……いくら俺にぶつけても、苦しくなるだけだ。ヒルダを守りたかったのも、大切にしたかったのも 救われないのも、おまえだろ」

握り締められたリュカの拳が震える。

今でも思い出す。平穏な日常を切り裂いた、あの日のリュカの声。

『助けて！ ヒルダが大人達に殺される！！』

誰よりも早く、誰よりも必死になって俺の元に駆けつけてきたのは、紛れもなくリュカだった。いつもヒルダをからかっていた少年たちの中で、まとめ役だったリュカ。そして、ヒルダをいじめている時の感情の中に、あの年頃の男の子特有の淡い想いがあったのは、当時の俺も気づいていた。

幼かったリュカは、俺のように村から逃げ出すことは出来なかつ

た。どんなに村の人間を憎んでも、災厄の乙女を恨んでも。そしてあの時の俺には、そんなリュカを気遣う余裕なんてなかった。

村の中で、リュカだけが異質だった。誰も口に出さないヒルダの名を、迷うことなく口にする。俺を遠目に見ているばかりの人々を嘲笑うように俺に話しかけてくる。リュカには俺に対して罪悪感を抱く原因がないのだ。あの日、リュカはヒルダを助けようとした数少ない人間なのだから。

ぽたり、と一粒の雫が落ちた。

「……………そうだよ」

小さな声は、まるで迷子のように力がなかった。一粒落ちたきり、雫は落ちない。

「俺はずっと、ヒルダを守りたかったんだ。いつも駆けつけてきたレギオンみたいに、背にかばって。…………でも俺には無理だった。あまりにも非力で、あまりにも無力で。あの時、ヒルダを守ってやれなかった」

幼い子どもに、大人に囲まれて暴力を受けるヒルダを庇うことなんて出来るわけがない。けれどリュカの中で「守れなかった」という思いは重石となって今も心に沈んでいる。告げることの出来なかった想いと一緒に。

「ごめんな」

俯くリュカの頭をくしゃりと撫で、苦笑する。

「おまえは苦しんでいるんだろうに、俺は、おまえがヒルダのことを覚えていてくれて、嬉しいんだ」

リュカは俺を見上げて、唇を噛み締めていた。睨むようなその目

は、幼い頃からまるで変わらない。ヒルダを助けに行くたびに、リユカは今と同じ目で俺を見てきた。

「あんたはいつもそうやってずるいんだ」

悔しそうにそう呟きながら、リユカは俺の手を振り払う。

「大人はずるいもんだよ。……ヒルダだって、おまえが忘れずにいてくれることを喜んでいるだろうさ」

誰かを恨むような、そんな子ではなかったから。ヒルダという「災厄の乙女」を恐れて忘れずにいるのではなくて、ただのヒルダという女の子を覚えていてくれる人がいることを、喜ぶだろう。

「わかってるよ、そんなことくらい……！」

偉そうに言うな、とリユカは俺の胸を拳で軽く小突く。弟がいたらこんな感じだろうな、と少し想像して笑う。

「話がすり替わってるだろ。身代わりじゃないっていうなら、どうして」

下から睨むように問いかけてくるリユカに、どうしたものかと言葉を探す。マリーツィアとの経緯を全て話すわけにはいかない。

ただ　そう。

「……放っておけなかったんだよ」

あの森に。

たった一人、己の死を待ち望む少女がいると、忘れることなんて出来なかった。

9：愚かな恋情

グリーンワーズの森を離れた時、少しだけほっとしたような気がした。忘れてしまえばいい、あんなちっぽけな少女のことは。もう災厄の乙女なんて忘れて、大人しくその他の人間にまぎれて生きていけばいい。そう思う心が確かにあった。

それなのに、脳裏にあの深緑の瞳が焼き付いて離れない。

優しく、ひどい人だった、と。そう告げる瞳が悲しげに揺れていて、それでもその未来を予知したかのように悟りきっていて。

悪酔いしているみたいだ。いつまでたってもすっきりしない。

あの少女と別れてから一カ月。その間は、ただひたすらに忘れようと心掛けた。けれど、それが無理なのだと分かって、大人しく諦めることにした。そして忘れることができないのならいつそ、と『災厄の乙女』を調べ始めたのもその頃だった。

たった一人の少女の死が、王国を滅ぼすなんて、そんなお伽話のようなことがあるのだろうか。心の片隅でそう思っただけだった。しかし、いざ調べてみれば不審な点はいくつもあった。

そうするうちに、いつの間にか思考のほとんどは彼女で埋め尽くされていった。どうしているだろうか、なんて考える度に彼女が一人になるという決断をさせたのは自分だろう、と叱責する。中途半端に優しくなんてしたから、彼女はその優しさを拒んだのだ。

放っておけなかった。それは性格なのかもしれない。最初の頃は、妹と重ね合わせていたのかもしれない。それを否定することはできなかった。

森で一人、時間の流れを忘れたかのように横たわる彼女を見るまでは。

『忘れないでしよう?』

死を望み、そして俺に殺されることで俺の中に自分を刻み込もうとする少女を見て、自分の中にあった違和感に決着がつく。妹なんかじゃない。

森に来るまで散々悩んだ。死なせてやる方が幸せなのかもしれない、なんて自問自答を繰り返しながら。決定権は俺に預けられていた。彼女と再会しても、心は揺れていた。彼女の幸せがなんであるかなんて、俺には分からない。けれど。

泣きながら、誰かに覚えていて欲しいと。その誰かは俺がいいと。その為に殺してほしいと願う彼女を見て確信した。俺には、彼女を殺せない。殺すことなんてできない。

剣を振るい、必要があれば誰かを傷つけ、誰かの命を奪うことが出来る自信はあった。騎士団に入っているのだから、それは当然あるべき覚悟だった。大切な肉親はもういない。避けられないことならば、親しかった人間でも斬ることはできると思っている。

それでも、彼女だけは。

この手で殺すことはできない。生きていて欲しい。生きて幸せになっただけ欲しい。そう願ってしまった。

「レギオン?」

急に黙り込んだ俺を不審がりながら、リュカが名前を呼ぶ。

意識が飛んでいたな、と苦笑しながら髪を掻きあげて「なんでもない」と答えた。リュカは訝しげにこちらを見ている。

「身代わりじゃないし、同情でもない。そんなことで一緒にいるわけじゃないから、安心しろ」

むしろそんな理由でここまでの決断ができるほど、お人好しでもない。

「それなら、いいけどさ」

釈然としない、と言いたげな顔ではあるものの、リュカは大人しく引き下がってくれた。話そうと思えば話せる事情ではあるものの、こんな誰が聞いているかも分からない場所で話し始めるものでもない。

「それで？　いつまでいるつもりなんだ？」

「それはお姫様のご機嫌次第。今のところ俺に決定権はないからな」
茶化すようにそう告げると、リュカは「ふうん」と呟く。少し話しこんでいたせいで、空は明るくなってきていた。

「俺そろそろ行くな。長居するのは別にいいけどさ、あんたの家だし。ただ村の奴らには気を付けたほうがいいんじゃない？」

分かってるだろうけどさ、と付け足しながら与えられた助言に、素直に頷いておく。大人になったな、なんて言ったらリュカの機嫌を損ねるだろう。

じゃあ、と言ってリュカは村の外れの方へと歩き出す。向こうにあるのは、昨夜マリーツィアを連れて行った墓地くらいだ。なんとなくリュカの行き先と理由が分かった気がした。

「リュカ」

少し遠ざかった背に声をかける。リュカはすぐに立ち止まって振り返った。瞳が「なんだよ」と告げている。

「いつまでいるか分からないが、暇だったらあいつの相手してやってくれ。あまり人づきあいに慣れてないんだ」

年も近いから、すぐに打ち解けないだろうか。そんな打算も込め

て言つと、リュカはめんどくさい、と顔を歪める。

「……ま、暇だったらな」

しかし最後にはそう言つて、リュカはまた歩き出した。なんだかんだで面倒見がいいのも昔から変わらない。

これで少しでもマリーツィアの人見知りが治ればいいんだが、と思ひながら家に入ると、マリーツィアが眠る部屋の扉が開いていて、眠そくに目をこするマリーツィアが立っていた。

「なんか、外で話し声がした……？ 誰かいたの、レギオン」

ぼんやりとした、まだ夢の中にいるような声に微笑む。外は明るくなつてきたが、目覚めるにはまだ少し早い。

「家の外でリュカと会つたんだ。起こしたか」

「いいの、今日は早起きしてごはん作るつもりだったから」

ふぁ、とあくびをしながらマリーツィアはぼさぼさになった髪を手で整える。くせのない髪は少し撫でつけるだけである程度整つてしまふ。櫛で梳かすくらいすればいいのに、と思うがいつも口には出さない。森を出た時には用意していなかった櫛や鏡だって、王都を出た時にラナから押しつけられていたはずだ。

どうも自分の容姿にはこだわりがないらしい少女に、これでいいものかと考えてしまふ。本来ならば可愛い服を着て、化粧にだつて興味を示す年頃だろうに。顔を洗つてきた後で、いそいそと少し危なっかしい手つきで朝食の準備を始めるマリーツィアを見る。森にいた頃とは比べ物にもならないほど表情は豊かになった。

あの頃のマリーツィアと言つたら、笑顔の底にも絶望を潜ませていて、悲しみの裏には諦めを隠していた。感情のすべてを鈍らせていたと言えいいのだろうか。

今の彼女は違う。感情が素直に顔に出る。嬉しければ笑う。笑つた時の顔は、花が綻ぶように幸せそうだ。

殺せない、と思つたあの日。

俺は自分のエゴを彼女に押しつけた。幸せになれと。幸せになつ

て生きてくれと。そのためなら俺はいくらでもこの身を犠牲にして
おまえを守るから。

妹の代わりなんかじゃない。同情でも憐れみでもない。

そう、俺は。

十歳以上も下の、災厄の乙女と呼ばれたこの少女を、いつの間に
か愛していたんだ。

10：少女が願うこと

雛鳥は、いつか巣立つ。

親鳥はその為に雛鳥を守らなければならない。あらゆることを授けて、与えられるだけのものを与えて。

今はまだ雛で、親鳥が恋しいとしても。世界が広いことを知れば自然と目は他へ向けられるだろう。そうしていつか自分の場所を見つけるに違いない。

それでいい、と思った。

この恋情は報われなくていい。報われることを俺は望まない。

一度だけでなく二度、彼女を殺そうと思った。そんなことを考えた男が、愛して欲しいなんて、そんな馬鹿げた話があるだろうか。

村に到着してから五日が経った。何もない村での五日というと、やることなど皆無に等しく退屈を持て余している。

けれどマリーツィアはというと、楽しそうに家の掃除をしていたり、危なっかしい手つきで料理をしていたり、人目の少ない早朝や夜にヒルダと両親の墓へ行っているようだった。

「今日ね、朝にお墓参りに行ったんだけど、リュカに会ったよ」

俺の頼みを律儀に守ったのか、マリーツィアの話からはちょこちよことリュカの名前が出るようになった。どうやって話すようになったかまでは言っていないので知らない。リュカから話しかけたのは間違いないだろう。

「だろうな」

紅茶を飲みながら答えると、マリーツィアが面白くなさそうに頬を膨らませる。

「だろうなつて……まるで分かってたみたいな言い方」

「分かってたからな」

先日の、行き先を聞いた時にリュカが口籠もったのは、ヒルダのところへ行っていたからだだろう。おそらく二、三日に一度、もしかしたら毎朝のように。

俺が以前に災厄の乙女を恨んだように、リュカはこの村を恨んでいるのではないだろうか。だからこそ逃げ場所はヒルダの墓しかない。

「お墓、今日も綺麗だった」

嬉しいような、困っているような、そんな声でマリーツィアが呟く。

「それを知ってる」

俺は苦笑しながら答える。俺が王都へ移住してからも、ヒルダの墓はまるで新品のように綺麗なままだ。誰が、というわけでもなくこの村の人々がいつも綺麗にしてくれているんだろう。もう五日もここにいるんだ、俺が帰って来ていることに気づいていないわけがないだろうに。

そう、もう五日も経っている。

「……いいかげん、満足しただろ。そろそろ出立するか」

「やだ」

即答だった。

ため息を零しながら頭を抱える。彼女がこうもこの村に居たがる理由が思いつかないから、余計にどう対処していいものか悩んでいた。

「手紙なら諦める」

「り、理由は手紙だけじゃないもん」

ここに残りたいという理由に使ったのは手紙のことだろうが、と追撃したくなつたが、ここでそれを言えばマリーツィアはますます意固地になりそうな気がした。今はまさに昼食の準備をしていたところだ。ナイフを持っている人間の神経を逆なでするのは得策じゃ

ない。

「じゃあ、他の理由は？」

お手上げ状態の俺は素直にマリーツィアに問うた。マリーツィアは手に持っているナイフとじゃがいもを見つめながら、どう説明したらいいのか分からないといった顔をしている。危ないからとりあえずナイフは置け、と言いたい。

お互いが口を開かない。沈黙が重く部屋の中に落ちた。

そんなに難しいことを聞いているのだろうか、俺は。そんな風に思いながらも、ただマリーツィアが口を開くのを待った。この沈黙を破るのは、彼女の役目だ。

マリーツィアは何度か話そうとし、そしてまた口を嚙む。それを何回か繰り返した頃だ。

「レギオンは、この村が好きでしょう？」

手元へ視線を落としたまま、マリーツィアが口を開いた。予想していなかった問いに、俺は言葉を失った。嫌いか、と問われたらすぐに答えることが出来た。嫌いにはなれない、と。

「好きだけど、素直に好きって言えないでしょう？ 村の人達にも素直に挨拶できないでしょう？ …… そういうわだかまりを残したまま、行きたくないの。だってもう、この国には戻らない覚悟でいるんだって知ってるから」

ことん、とマリーツィアがナイフを置く。頭の中では彼女の言葉を反芻していて、音がなければナイフを置いたことにすら気づけなかったかもしれない。

ただの、我儘だと思っていた。

でもこれは、我儘と言えるだろうか？

気づけば深緑の瞳はこちらを射抜くように見つめている。動揺している心の中を全て見透かしてしまわれそうなのに、それでも目を逸らすことができなかった。

「私は、レギオンに後悔してほしくない」

きゅっと引き結ばれた唇からは、固い決意を感じ取れる。迷いの

ない瞳は、迷いだらけのこちらには眩しすぎた。

マリーツィアの言葉は深く胸の奥底に刺さった。

この国には戻らない。そうだ。彼女が幸せに暮らしていけるところへ行くと決めた時に、この国の地はもう踏まないだろうと思った。マリーツィアが言わなければ、この村にすらこなかった。

国にとどまることはすなわちマリーツィアの身の危険にも繋がるから。

でもそれは、自分への言い訳だ。

村に来たところで、挨拶する人間なんていない。せいぜいヒルダと両親の墓参りをするくらいだ。いまさら何をどうやっても、俺と村人たちの間にある溝が埋まることなどないのだから。そう言い聞かせて俺は自分から動くことを止めた。もう何年も前に。

ヒルダが死んだあと、まだ若かった俺は村の全てが憎かった。けれど二十歳も過ぎて、村から離れて考えれば少しは分かる。あの時、あの事件で、真に悪かった者などいかなかったのだと。すべては見えない何かに怯えた人間の弱さが起こしたものだんだと。

この村を嫌いにはなれない。当たり前だ。自分の生まれ育った土地なのだから。どんなに忌まわしい過去が記憶に根付いてしても、それ以前の過去が消えるわけではないから。幸せだった頃の記憶も、自分の中でひっそりと生きているから。

ヒルダの笑顔は、いつまでも記憶の中で褪せることなく残っているのだから。

マリーツィアは俺を見上げて微笑む。

「すべて上手くいくとは思わないけど、でも、少しでも納得できる形があるんじゃないかなって思うの。今のまま、無理だからって諦めて突き放すんじゃないくて、レギオンにとっても村の人達にとっても、一番いい形を見つける時なんじゃないかなあって」

幼いと思っていた少女は、思っていた以上にしっかりしていた。

俺なんかよりもずっと、未来のことを考えられているのかもしれない。

諦め。確かにそうだ。どう足掻いても消えることのない溝は、忘れることでしか解決できないと諦めていた。

「……それが見つかるまで、ここにいつもりか？」

苦笑しながら問うと、マリーツィアは「うん」と素直に頷いた。

「そうしないと、レギオンは落ちつける場所を見つけても、何年かして『ああすれば良かった』って後悔するよ。後悔しないで生きていくのは無理かもしれないけど、できるだけ少ない方がいいよね」
その時のマリーツィアの笑顔といたら、花が綻ぶように生き生きとして、幸せそうだった。こんな顔をされて、これほどまでに俺のことを考えて行動している彼女の願いを、押しのけることなんて出来るだろうか。

彼女の中で、何年か先も俺が傍にいて、という未来があつて。そんな儚い未来に苦笑しながらも、心の中では喜んでいて。顔には出していない自信がある。彼女はいつまで、雛鳥でいてくれるんだろうか、なんて欲が出た。

「私ね、レギオンが私のためにいろんなものを捨てていくのは理解してるつもり。でもその中には捨てなくてもいいものもあると思うんだ。私は、レギオンに何もかも失わせたいわけじゃない。身軽になるために、捨てなくていいものまで捨てる必要なんてないの」

そう俺に諭すマリーツィアは、少女というには大人びている。最近ではマリーツィアに驚かされてばかりだ。こんな表情をする少女だっただろうか。こんな、立派な女の顔をして。

動揺を悟られたくなくて、俺はマリーツィアから顔をそらした。

「何もかも捨ててるわけじゃない」

言い訳のようにそう呟くと、マリーツィアが「嘘ばかり」と少し怒ったように答えた。

「私はそんな重い荷物になりたくない」

レギオンのために、私だって何かしたいんだよ。

胸を突く無自覚の甘い言葉に、俺は深くため息を吐き出した。十歳以上下の娘に、どうしてこつも負けてしまうのか。

11：過去の束縛

ラナさんへ

お元気ですか。このあいだてがみを出してからあまりたつていないのに、またてがみをかいています。

前のがみにかいたリユカという子とは、少しだけなかくないりました。おはかまいりしてるときに 会ったんです。あまり知らない人と はなすのはちよつとだけ こわいんですが、はなしてみたらいい子でした。リユカはヒルダさんとながかつたみたいです。私はヒルダさんに似てるのつてきいたら、似てないつて言われました。

レギオンにわがままをいつて、いまはこの村にいます。ちよつとだけ長くいる つもりです。

レギオンはいつもわたしのこと ばかりで、じぶんのことをかんがえてくれないから わたしがレギオンのことをかんがえたいなつておもたです。レギオンがじぶんのためにうごかないなら、私がレギオンのためにうごこうつて。

村にきてからレギオンとはなれてこうどうすることもあります、そういうとき、むねがきゅうつと苦しくなります。でもいっしょにいても苦しいときがあります。どうしてでしょうか。

わたしはずつとずつと、レギオンのそばにいたい。

苦しくてもつらくても、レギオンのそばがいい。

おうとを出たときに、決めたんです。レギオンはたくさんものをわたしのためにすていくから、わたしもたくさんものをすてても、レギオンの手だけは はなさないつて。

でもときどきおもいます。

レギオンも、わたしと同じようにねがつていてくれるんでしょうか。

レギオンがたくさんのものをすてるのは、いやです。けど、わたしの手をはなさないでいてほしいとおもいます。わたしは、ワガママなんでしょうか？

レギオンに会ってから、わたしはすぐすぐワガママになったような気がします。まえは、もつとなにものぞまないで生きていられたのに。

さいきんは、わたしはわたしのことがよくわかりません。

まだ少しこの村にいますとおもいます。

よければおへんじください。まっています。

部屋に籠っていたかと思うと、マリーツィアは一通の封筒と手に出てきた。どうやらまたラナに手紙でも書いていたらしい。

「手紙、出してくるね」

「一人で大丈夫か？」

ここ数日、マリーツィア一人で行動することはあったものの、大半は人気のない墓地へ行くことだ。俺と一緒にいない時もリュカといることが多いのであまり心配せずに放っておいたが、手紙を出すということはリュカ以外の村人と接触することになる。

「大丈夫だよ、郵便屋さんに行くだけだもん」

「その郵便屋がどこかも知らないだろうが、おまえは」

はあ、とため息を吐いて立ちあがる。どうせしばらく滞在を続けるとなれば、食料は嫌でも尽きる。ついでに何か買い足そうかと思つた時だった。何の前触れもなく玄関が開く。

「おはよー……ってなんだ。おまえら二人して」

リュカは怪訝そうな顔で、立ったままの俺とマリーツィアを見た。ちようどいい、と俺は脱力しながら椅子に座る。

「リュカにでも案内してもらえ。マリーツィア、髪はちゃんと隠し

ておけよ」

「うん」

マリーツィアは素直に頷いて、マントを羽織りフードを被る。フードはマリーツィアの白い髪を覆い隠すだけでなく、その深い緑色の瞳も影に潜ませた。

「人の都合も聞かずに……横暴だな、レギオンは。それで？ どこいくんだ、マリー」

「郵便屋さん。手紙を出すの」

横暴と言いつつもきちんとマリーツィアを案内してくれるらしいリュカの姿に、こっそりと微笑みながら、家を出ていく二人を見送る。

ぱたん、と扉が閉まってリュカとマリーツィアの姿が見えなくなると、途端に静かになったような気がする。少し覚めた紅茶を飲みながら、マリーツィアのことを考えていた。

子ども子どもと思ってきたが、こちらの予想以上にいろいろ考えているらしいこと。俺の言うことをただ素直に受け入れているだけかと思ったら、そうでもないらしいということ。それはどちらも喜ばしい変化だ。未来を見据える思考力も、俺の意見をただ鵜呑みにするだけじゃない自立性も、彼女には必要なものだから。

だから、出来ることなら俺と離れて行動していた方がいい。もちろん、危険のない範囲で。

時計の針が半周するのを待ち、ゆつくりと紅茶を飲み干して、俺は立ち上がる。ついでに、と思っていた買いものに行くためだ。向こうで鉢合わせすることもあるだろうから、もう一度墓参りにでも行くか、と足は村の中心ではなく外れへと向かっていた。

「ヒルダ。父さん、母さんも」

家族の墓の前に、どんな顔をしたらいいのかも分からず小さな声で呼びかけた。

その後はなんと言っているのか分からず、墓の前に膝をついて苦笑する。相変わらず綺麗な墓は、これからどれだけこの美しさを保っているかわかるだろうか。

「俺は、結局どうしたいんだろうな」

呟いたところでどうしようもないというのに、気づけば言葉が零れていた。心の中では自分の行動や今後のことでぐちゃぐちゃで、その中心にはいつだってマリーツィアという少女がいた。

「自分の幸せなんて、もうとうの昔にどうでも良かった。でも、俺が幸せになって欲しいと望む人は、俺の幸せまで望む。俺と一緒にいたところで、彼女が幸せになれるとは思えないんだけどな」

ふわりと風がそよぐ。まるで両親が幼い頃に頭を撫でてくれた時のように。ああ、誰かに甘えるなんて、もう随分長いことしていないんだな、と思った。大人の男としてのプライドもある。甘えられるような女はここ数年作っていない。

「俺は、もしかしたら、俺が幸せになることが許せないのかもしれない」

いつまでも心の中では、妹を守れなかったことに対する罪の意識がある。マリーツィアを殺そうと考えてあの森へ行ったことへの罪悪感。そう、俺という人間は罪にまみれているような気がして。

ヒルダにも両親にも怒られるな、と思った。そんなことは考えるな、おまえは生きて幸せになれ、と。もし死者と対話が出来るというのなら、彼らはそう言うだろう。

分かっているのに、足はその場に縫い付けられて動かない。

リュカがあの日記憶に縛られているように、俺もまだ縛られているのかもしれない。

本来の目的を、と村の中心部へ向かうと、徐々に異様な空気が漂っていることに気づいた。もともと穏やかではない村だが、これは

あまりにも異常だ。

俺の姿を見つけた村人たちは、目を逸らし身を隠し、遠目にこちらを窺っている。村に到着してから時折外に出ていたが、こういったあからさまな反応はなかったはずだ。

嫌な予感が、胸をよぎる。

自然と小走りになった。小さな村だ、すぐにその姿は見つかる。人込みに隠れるようにフードを被っているのではなく、その誰の侵入も許さぬ真白い髪が日の元に晒されているのなら、なおさら。

「マリーツィア！」

呼ぶと、彼女の白い髪が揺れる。隣に立つリユカは周囲を警戒するように睨みつけていた。

何かを恐れるように、マリーツィアとリユカを取り囲み様子を見る村人。それは、悪い夢か何かのようだ。

「レギオン」

小さすぎず、けれど大きすぎるわけでもない声が俺の名前を呼ぶ。こちらを見た深緑の瞳は、戸惑いからア安堵へと色を変えた。

何があつたのかは知らない。マリーツィアが自分からフードを外したとは思えない。何かしらのアクシデントがあつたんだろう。昼時の、人々の多い村の市場で。

「怪我はないな」

俺を避けるように割れた人々を無視して、マリーツィアのもとへと駆け寄る。マリーツィアは俺を見上げて「うん」と微笑んだ。安心したのはこちらも一緒だ。

「帰るぞ」

こんなところへ長居する必要はない。俺はマリーツィアの膝裏へ腕を差し込み、そのまま有無を言わず持ち上げた。マリーツィアは驚いたように声をあげたあと、甘えるように俺の首に抱きつく。

「リユカも……ちよつと付き合え」

「ん」

村人の注目を集める中、心地よくもない視線を受け流して家へと

向かう。リュカは少し後ろを大人しくついてきた。俺たちの背を見つめる人間はいても、そのあとを追う奴はいない。家が見え始めた頃には、居心地の悪さはなくなっていた。

12：甘い香りと、苦い想い

家に着いた途端、マリーツィアがごめんね、と呟いた。

緊張して固くなっていた身体が、わずかに弛緩する。

「ごめんね、レギオン。気をつけてるのに、どうしてこうなっちゃうんだろっね」

腕の中で小さく震える少女は、まるで悪夢にうなされているかのよう、何度も何度もごめんねと繰り返した。

普段の無邪気な彼女からは想像できないほど小さくなった姿に、彼女のこれまでの人生が思い知らされる。災厄の乙女として過ごしてきた十五年間は、どれほど彼女を悪意の目に晒したのだろうか。あの閉ざされた森の中ですら、人々は小さな少女へ負の感情を投げつける。

あの森を出てから、マリーツィアはいつだって心のどこかで怯えていた。やっと掴んだわずかな希望が、ほんの些細なことで簡単に崩れ去ってしまうのではないかと。

「ごめんね」

何度も繰り返される言葉に、胸が締め付けられるようだった。

「……気にするな。不可抗力だ」

本当はどうしてあんな状況になったのか推測しかできないが、マリーツィアの頭を撫でてそう答える。彼女は白い髪を隠していた。それだけは聞かなくても分かる。

「でも」

「いいから」

なおも自分を責めようとするマリーツィアの目を手で塞ぐ。泣きたいなら泣いてくれ、頼むから耐えないでくれ。そう何度願っても彼女は一滴も涙を流さずに、俯いて、唇を噛み締めて、身体を震わせる。素直に泣いてくれれば、こちらで慰めることができるのに。

「落ちつけ。俺は怒ってないから。おまえは悪くない、いいな?」
静かに、ゆつくりと、マリーツィアに言い聞かせると、泣くこと
もしない少女はゆるゆると頷いた。

マリーツィアを椅子に座らせて、振り返る。玄関から一步の動か
ずに、申し訳なさそうな顔をしてリュカが立って　立ち尽くして
いた。こいつも自分を責めているんだろうな、と俺は胸に溜まった
息を吐き出した。

「リュカ」

名前を呼ぶと、リュカの肩がびくりと震える。叱られる前の子ど
もみたいだ。

「おまえもこっち来て座れ」

「いや、でも……」

躊躇う姿に、ため息を吐き出す。すぐ傍のキッチンで鍋にミルク
を注ぎ、温める。リュカはおろおろと俺の背中を見つめているばか
りで、座ろうとしない。

「リュカ。おまえまで俺がエスコートしなきゃ座れないのか?」

茶化すように言うと、リュカは頬を赤く染めて椅子を乱暴に引い
た。マリーツィアを向かい合わせで座る。

くつくつとミルクが鍋の中で温められる。ほどよい頃合いを見計
らってカップに注ぎ、マリーツィアとリュカの前に置いた。ホット
ミルクなんて、子どもっぽい飲み物も、こういう時は心を癒してく
れる。

二人ともしばらく無言のまま、湯気のたつホットミルクを見つめ
ていた。俺はキッチンに背を預けて自分用のコーヒーを飲む。石か
なにかになったんじゃないかと疑いたくなるくらいに、座ったまま
固まっている二人を見て「冷めるぞ」と声をかけた。すると先にマ
リーツィアがカップに手を伸ばして、そつと口をつける。ここまで
香る甘い香りに、マリーツィアはわずかに頬を緩めた。つられるよ
うにしてリュカもまた一口飲む。ほう、と一息吐きだすと、固くな
っていた身体がゆるゆると力を抜いていく。

カチコチと、時計の音がやたらと大きく部屋の中に響いて。

自分のコーヒーを飲みほしたところで、俺は二人を見た。

「……それで、どうしてあんなことになったんだ？」

二人ともホットミルクを数口飲んだところで、あまりきつくないように声を抑えて問いかけた。リユカはカップを両手で包み込んで俯き、マリーツィアは俺を見上げる。

「ちゃんと、フードをかぶっていたんだけどね。男の人とぶつかった時に、フードがひっかかっちゃったみたいなの。それで、気づいたら……」

村人の目は、その白い髪に集まっていた。この村にとってはまさに災いの象徴ともいえる、その白に。

「ああいうの、久しぶりだったから、足が竦んで動けなくなっちゃった」

苦笑いを浮かべて、マリーツィアは温くなり始めたカップを握りしめた。グリーンワーズの森にいた頃の彼女は、どんな視線を浴びせられても、気にもせずには笑っていた。それは、とても歪な笑顔ではあったものの、彼女は自分を守るために気づかないふりを続けることができたのだ。心の痛みに鈍感になること。それは、果たして良かったのか、悪かったのか。こうなるとよく分からなくなる。

「……仕方ないな、マリーツィア。出立の準備をしておけ」

はぁ、とため息を吐き出してそう告げると、マリーツィアは顔をあげてこちらを見る。大きな瞳は、どうして、と訴えていた。

「こんな状況で、長居できるわけがない」

ヒルダの二の舞なんてごめんだ。言外にそう告げると、リユカは俯いた。しかしマリーツィアは意志の強い深緑の瞳で、俺を射抜くように見つめてくる。

「大丈夫だよ」

どこからそんな自信が湧くのだろうかというくらいに、しっかりとした声で、彼女は俺に告げた。先程まであんなに怯えて、震えていたくせに。

「びつくりしたし、ちょっと怖かったけど、でも大丈夫。この村の人は、私を傷つけたりしないよ」

「……どうしてそう言い切れる」

既に前例があるというのに。俺はわずかに苛立ち始めた心を理性で抑えつけながら、マリーツィアを見下ろした。

「村の人も、怯えていただけだよ。殺意とか憎悪とかあったわけじゃない。分かるの、私は今までいろんな人から、いろんな目で見られたから」

だから、大丈夫だよ。マリーツィアは柔く微笑みながらもう一度そう告げる。それは、確証があるわけでもない、ただの少女の勘。

結局のところ、この少女に絆されてしまうんだと俺は知っていた。彼女が決めたことを、俺は覆せない。この先彼女に危険が及ぶようなことがあるとしても、彼女はその道を進むという。なら、俺はその傍にいないことしかできない。

「……今回だけ、見逃してやる。次に同じことがあったらもう譲歩しないからな」

釘をさしながらも、結局折れるのは俺の方だ。勝敗なんて初めから分かっているけれど、負ける度に苦々しい。本当はすぐにでも村を発ってしまった方が、マリーツィアが危険な目にある可能性は格段に減るのに。

「うん、勝手にするね」

マリーツィアは嬉しそうに笑って、そういうものだから、本当に始末に負えない。十も年上の男を手のひらの上で転がしてやがる。それも無自覚で。

「……俺は、あんまりおすすめしないけど。けどまだこの村にいていうなら、少しくらい協力してやるよ」

カップに残っていたミルクを飲みほして、リュカは立ち上がる。あまり気乗りしていないその表情は、たぶん俺と同じことを懸念しているからだろう。

「俺はこの村の人間だけど、他の奴らの考えてることは分からない。

でもたぶん、マリーが言ってることは間違っていないと思うよ。…
…誰だって、傷つきたいわけじゃないんだ」
玄関の扉を開け、外へと出る瞬間、リユカはぼつりと呟いた。それはまるで願いのように、小さく、小さく。
ぱたん、と閉じた扉の音が、その願いを押しつぶすように空しく響いた。

13：やさしいきつけ

あまり村人を刺激しない方がいいだろう、という結論に至り、騒ぎの翌日はマリーツィアと二人で家から出ずに過ごした。よほど暇だったのか、マリーツィアは掃除を始めて、家のあちこちをぴかぴかに磨き上げていた。手紙はあの騒ぎになる前に出したと言っていたから、彼女としても外に出る理由がなかったのだろう。

しかし丸一日以上家に閉じこもっていれば、当然食料がなくなる。買いに行かなければ餓えるだけだ。ため息を零して「買い出しに行くか」と呟くと、こちらのことなど気にもかけず大掃除二日目を迎えていたマリーツィアが振り返る。

「外に行くの？ 私も行つていい？」

騒ぎのことなど欠片も覚えていないような陽気な声に、俺は心の底から呆れた。こりないのか、と説教を始める前に、マリーツィアはいそいそと掃除用具を片付け始める。

「マリーツィア。おまえは家にいろ」

分かっているだろ、と告げたところで、マリーツィアは俺を見てあわく微笑む。とことこと歩み寄ってきて、小さく白い手が伸びてきた。人差し指がつん、と俺の眉間に触れる。

「皺、寄ってるよ。レギオン」

笑って、そしてマリーツィアはマントも羽織らずに外へ出る。白い髪を隠すものは何もない。

「マリーツィア！」

「隠したって意味ないよ。皆知ってるもん。行こうレギオン」

白い髪は日の下で美しく咲き誇る。あの森で咲いていた花のように。差し出された手を握りしめて、不安に揺れる心を奥底へ押し込めて俺は歩き出した。

生ぬるい風が頬を撫でる。俺の手を握り締める小さなぬくもりに、ただ縋るように祈った。どうか、彼女を傷つけるものがないません

ようにと。

市場へ入った瞬間に、ぞわりとするほどの視線がこちらに向けられた。その視線に憎悪や嫌悪の色はない。ただ、たくさんの人間の視線が集まるとそれだけで凶器となるのだと思い知らされる。手を繋いでいる少女は、素知らぬ顔で歩いていた。その表情に、彼女が言っていた「慣れている」という言葉の重さを実感する。彼女が浴びてきた視線は、こんな生易しいものじゃないだろう。

「えっと野菜がもうないよね。それに少し果物が欲しいなあ。卵はまだ少し残っているから、今日は　レギオン？」

きよろきよろと周りを見ながら、何を買うべきか考えているマリ―ツィアが、ふとこちらを見上げた。深い緑色は、森と同じ色をしている。

「なんだ」

「人の話聞いている？」

むすっとした顔でそう問いかけてきたので、ああこちらの意見を聞いていたのか、と思う。その様子が子どもっぽくで、緊張感を孕んだ空気が柔らんだ。

「聞いている。好きなものを買え。ただ買いすぎるなよ、どうせおまえはあまり食べないだろ」

「レギオンは大きいからいっぱい食べるもん」

「そんなに食べない。野菜なんて買えば腐らただけだろうが」
マリ―ツィアはうー、と唸りながらあれこれと店を見て回る。ふとマリ―ツィアの目線がひとつの店先に止まった。いろいろな動物の形をした飴を売っている店だ。棒の上にはうさぎや猫といった動物を模った、琥珀色の飴がある。子どもがおやつに利用する店だ。野菜だ果物だと主婦っぽいことを言っておきながら、と俺は苦笑した。

「……どれがいいんだ？」

店に近づきながら問うと、マリーツィアが「え」と目を丸くする。そして徐々に赤くなって、首を横に振った。

「い、いいらない」

傍へ寄ると甘い香りがする。マリーツィアはちらちらと飴を見ながら「欲しい」とは口にしなかった。ふう、とため息を吐き出して、小銭を出す。子どものおやつ用だけに、どれだけ大きなものを買ってもそれほど高いものじゃない。

「ひとつ」

小銭を店のおばさんに差し出せば、くすくすという微笑みが返ってきた。

「相変わらずだね、レギオン。ほら」

そう言って差し出されたのは小鳥の形をしたものと、猫の形をしたもののひとつずつだ。訝しげに眉を寄せると、おばさんは笑う。小さな頃からこの店先にいた人だ。

「おまけだよ。……おかえり、レギオン」

目元に皺を刻んで微笑むその人を見て、ああ老けたな、と思う。もつと大きな声で澀刺と笑う人だったのに。しかしその一言をきっかけに、村人たちから向けられた目が 視線の塊が和らいでいくような気がした。

ただいま、とも素直に言えずに、俺は小鳥の形をしたほうをマリーツィアに押しつける。マリーツィアはおばさんと俺とを交互に見て、ぺろりと飴をなめた。

「……！ 甘い！ おいしい！」

こんなどこにでもあるような飴だろうと思いつながらも、マリーツィアの嬉しそうな顔にふつと緊張が解けていく。おばさんはきょとんと目を丸くしたあとに、以前のような明るく元気のいい声で、腹の底から笑った。

「そうかい、おいしいかい！ うちの飴はね、魔法の飴だからね！」
「魔法の飴！？」

お決まりの子ども騙しの話に、マリーツィアが目を輝かせた。

「そうだよ、うちの飴にはね、しあわせになる魔法がかかっているんだ」

わぁ、とマリーツィアが嬉しそうに笑って、そして俺を見上げる。「じゃあレギオンも舐めなきゃ！」

それ、と指差されたのは猫の形の飴。いい年した大人が、これを舐めると。顔が引きつるのはどうしようもなかった。けれどマリーツィアが真剣な顔でこちらをじっと見る。逃げ道を探しながらも、簡単なのはこれをとっと食べてしまふことだと分かっていた。仕方なくそのまま飴を口に放り込む。噛み砕いてしまえば楽だが、動物の形をしたそれを粉々にしてしまうのは良心が痛む。

俺が飴を舐めていることを確認すると、マリーツィアは満足そうに頷いた。俺としてはこの年で飴を舐めていて、その棒が口から伸びているという状況こそ痛々しい。しかしその間抜けな光景のせいか、周囲の目がほとんどん柔らかくなってきたのは確かだった。

マリーツィアはそれからあちこちの店を覗いて、野菜を買いつつ果物を試食したりして楽しそうにしていた。本来無邪気で人懐っこい彼女はみるみるうちに村人の中へ溶け込んでいく。心配なんて杞憂にすぎなかったな、と苦笑した。口の中の飴は溶けて甘みを広げていく。

マリーツィアが俺の連れであることは、村人の誰もが分かっていることだった。マリーツィアの容姿を見ても訳ありなのは一目瞭然で、村人たちは自然と「災厄の乙女と同じような容姿をしている可哀想な女の子を、レギオンが放っておけなかったのだろう」という解釈をしたようだった。当たらずとも遠からず、と言った反応に、ただ苦笑する。

あちらこちらの店で話しかけられているマリーツィアを見張る。放っておくとどこへ行くか分からないが、一緒になって歩くこともないだろう。狭い市場だ。

「……すまなかつたね。この間は」

ちようどすぐそこにあつた出店のおばさんが、こちらを見てふと呟いた。

「驚いちまつただけなんだよ、皆。忘れられるはずもない、災厄の乙女のことを、あの子を見て思い出して。傷口を抉られて。あの子が悪いわけじゃないって、頭では分かっているんだ」

気を悪くしないでくれ、と言われてしまえば、俺も責めることなどできない。もともと誰かを責めるつもりなんてなかったが。

「気にしてない。仕方ないとは思ってたけどな」

「あんたはホント、小さい頃から聞きわけがいいんだか悪いんだか……」

変わらないねえ。そう呟く瞳はどこか嬉しそうでもあり、切なそうでもある。おばさんは「これを持っていきな」とお代も取らずに林檎を二つ押し付けた。断ろうかとタイミングを見計らっていると「レギオン！」と明るい声が近づいて来る。

「なんだか話していたらこんなにいっぱいもらっちゃった！ 食べきれるかな」

マリーツィアは嬉しそうに笑いながら野菜やら果物やらお菓子やらをいっぱい詰め込まれた大きな紙袋を両手に抱えている。マリーツィアに金を持たせていないから、これは全て村人からの好意、ということになる。

「おまえな……」

「だ、だつていらないうって言つても皆が押し付けてくるんだもん」
悪いことをしたのだろうかとしよげるマリーツィアを叱りつけるわけにもいかず、また自分も受け取ってしまった手前、なんとも言えない。

「何も言わずに受け取っておきな。皆嬉しいんだよ、久し振りにあなたの顔が見られて」

くすくすと笑うおばさんに同意するように、あちこちの村人が笑っていた。懐かしい風景だ。昔はこんな風に誰もが笑っていた。く

すぐつたくて、素直に笑えない。マリーツィアがそつと俺の手を握りしめて、しあわせそうに笑った。

深緑の瞳は優しく、穏やかで、俺はその目に応えるように不器用に微笑んだ。

14：ふたりのしあわせ

故郷の村で待っていたのは、予想外に穏やかな日々だった。

到着したばかりの日や、マリーツィアの白い髪が日の光の下で晒された日は、緊張で安眠できなかったが、今では朝寝坊できるまでに心は落ちついていて。寝すぎた、と思いながら部屋を出ると、とつくに起きていたマリーツィアが「おはよう」と笑った。

「今朝はね、ソフィアおさんからパンをわけてもらっちゃったんだ！ 朝ごはんに食べようね」

ここ数日、マリーツィアは朝早くにどこかへ行ってしまう。そしてひよつこりと戻ってきた時にはいつも何かしらをもらってきている。村の連中は俺の顔を見ると「いい子を見つけてきたもんだねえ」と笑う。……何やら勘違いされているようだ。

マリーツィアの無邪気な性格が良かったのだろう。あれほど頑なだった村の連中は、かつてそうであったように、にこやかに笑っている。遠い昔に、止まっていた時間がわずかに動きだしたようだ。それが良いことか悪いことかと問われれば、間違いなく良いことなのだろう。滞っていた村の空気は、冷たい山風に吹き飛ばされて、今となっては嘘のように澄んでいる。

顔を洗って、部屋に戻り、着替えを済ませる。平穏な日常を前に、少し呆けている。こんなにもあっさり、受け入れられるとは思っていなかった。人生どう転がるか分からないものだ、と苦笑しながらまた自室を出る。

「皆、優しいね。村で暮らすって、こんな感じなのかなあ」

スープを温めながらマリーツィアが呟く。物心がつく前にグリーンワーズの森に閉じ込められた彼女は、こんな当たり前の生活も知らない。

「昔から、うちの村には世話好きが多いんだよ」

両親が死んで、兄妹だけの暮らしになってもどうにか生活できた

のは、間違いなく村の人々のおかげだ。大丈夫か、と何かにつけて気にかけてもらっていた。そう、ここ数日のマリーツィアがそうであるように、ヒルダもよく何かをもらってきていた。

「……ねえ、レギオン。私は、このままこの村で暮らしても、いいと思うよ」

スープをかき混ぜながら、マリーツィアが小さく呟いた。深緑の瞳は、こちらを見るのが怖いのか、スープを見つめたままだ。

「無理に国を出なくてもいいと思うの。だって、レギオンの故郷はここだし、ご家族のお墓だってここにある。この村の人が私のことを嫌うなら仕方ないけど、でも、大丈夫そうだし」

それは、ここ数日ずっと俺も考えてきたことだった。

何も、国の外に出ることだけが解決策じゃない。どこかの小さな村で、時間をかけて居場所を作ることもある。それは以前から考えていたことだ。だからこそそれを打ち消す考えもある。この国に広まった「災厄の乙女」の影響は大きい。たとえ村の中で受け入れられても、村の外から来た人間に対してはそうじゃない。そして何より、長年過ごしてきた村の一員であっても、集団の恐怖の前には無力だ。……ヒルダがそうであったように。

「レギオンが心配するのも分かる。だから、少し考えてみようよ。それからでも遅くないよね？」

そう、これは急ぐ旅じゃない。旅が続くのであるのなら、ここは通過点に過ぎないはずなのだ。いつまで、どこまで、誰もそれを定めていない。マリーツィアが、平穩に暮らせるという場所に辿りつくまで終わらない。

「マリーツィア」

小さく名前を呼ぶ。

マリーツィアは何も言わずに振り返った。深緑の瞳は、俺と同じようにどうすればいいのか答えが分からずに揺れている。だがあえて俺は問うた。

「おまえは、ここがいいのか。それとも、ここでもいいのか」

それは似ているようでまるで違う答え。マリーツィアの目が揺れる。真っ直ぐに俺を見つめているのに、俺ではないどこかを見ている。小さな唇は震えて、何かを紡ごうとしては躊躇った。

「俺は、おまえが決めた場所ならどこでもいいと思う。おまえが、幸せになれるところなら。髪の毛を隠すことなく暮らして、いつも笑っていられるような場所なら。だけど、ここだと決断する要素に俺を入れるな。俺の故郷だからなんて考えるな。俺は、とうの昔にここを捨てたんだから」

「……ねえ、レギオン。どうして、私だけなの？」

小さな声は、びっくりするほど大きく響いた。揺れる深緑の瞳は、まるで迷子のそれと同じようだ。

「どうして、私だけが決めるの？ 私たち二人でいるのに、どうして私のことばかりなの？ レギオンは全然自分の意見を言わない。まるで、いつか切り離すって言ってるみたい」

どきっとした。

いつか、彼女が巣立つ時がくる。俺から離れる時がくる。だから彼女に最善であるように。俺はいつでもマリーツィアの前から消えることができるように。そう考えている俺を見透かすように、彼女は問う。

「レギオンの故郷だからって、考えるなって言われても考えちゃうよ。だって、当たり前でしょう？ 大事な人の、大事なところなんだもの。とうの昔に捨てたって言いながら、ここにいる間、レギオンはずっと落ち着いているんだもの」

「そんなことは」

「ないって言わせない。私だって、レギオンのことちゃんと見てるんだからね」

そう言つと、マリーツィアは静かにスープを俺の前に置く。向かいの席に腰を下ろして無言のまま食事を始め、これ以上は何も聞かないし言わないと決め込んだようだ。

大事な人の、大事なところ。

どうしてそんなに俺に懐くんだ。俺はおまえをあの森から連れ出しただけなのに。俺は、ただおまえを放っておけなかっただけなのに。そんな風に言われる資格はないのに。

それなのに、どうして。

「辛気臭え顔してんな、レギオン」

リュカが呆れた顔で玄関から入ってくる。マリーツィアは朝食を済ませると何も言わずに出かけていった。

「……おまえな、勝手に入ってくるなよ」

人の家に。リュカは気にした様子もなく勝手に椅子に座り、テーブルの上にある林檎を剥き始めた。すると器用に剥いている。皮がずつと繋がったままだ。

「村じゃあさ、レギオンが嫁を連れて帰ってきたって大騒ぎだぜ？ どうすんの？」

すると、林檎の皮が落ちていく。

「嫁じゃない」

「いやまあ知ってるけど。……そこじゃなくて」

綺麗に繋がった皮を捨てて、リュカは林檎をかじる。分かっている。でもそこは否定せずにはいられない。

「このまま村に定住？ それもいいかもしれないけどさ……俺としては、あんまりオススメしない」

「……だろうな」

ヒルダの事件を誰よりも忘れられずにいるリュカには、あまり喜ばしいことではないだろう。最近ではマリーツィアとも仲良くしてい

るようだから、なおさらだ。

「マリーの気持ちも、分からなくはないけどね。でもやっぱり、いい選択ではないと思う」

漠然とした不安がずっと胸を覆っている。それは簡単には拭いされないものだった。

「あれは頑固だからな。どう説得したもんか……」

「頑固ねえ。マリーのは、頑固とはまた違うよ」

リュカが林檎を頬張りながら呟く。

「マリーは、あんたが好きなんだろ。だから、レギオンにとっての一番の選択を探しているんだよ。似た者同士だよ、あんたら」

「俺は……」

好きだと、素直に言っていないものだろうか。苦笑して口籠もる。彼女を安全な場所へ、幸せになれる場所へ、と願うのは単純に恋情から発生したものとは言い難い。

「違うか。マリーはレギオンにとっての一番を探しているんじゃない。二人にとって、一番幸せになれる場所を探しているんだ」

何気ないリュカの言葉がぐさりと刺さる。どちらかにとって、じゃない。どちらにも。俺とマリーツィア、二人の幸せを。

どうして、私だけが決めるの？ 私たち二人でいるのに、どうして私のことばかりなの？ そう問いかけるマリーツィアの声が

頭の中で響いている。

「レギオン、あんたとずっと認めたほうが楽になれると思うよ」

十年前には俺に蹴散らされてばかりいた子どもが、呆れを含んだ目で俺を諭す。すごく複雑な気持ちだった。

認める？ 何を？

分かっている、俺は気づかないふりをしたくて仕方なかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8259s/>

グリンワーズの災厄の乙女【第三部・故郷編】

2011年10月24日03時28分発行